



多様性連帯のこのごろ

獄中で僕は、レーニン像が独裁と圧制の象徴としてなぎ倒され、民衆が拍手喝采を送る。レーニン姿を見て、このまま終わつたな」と痛感した。ましてや、共産主義者

ともないレーニンばかり読むようになった。いちおう超低賃金だつたけど、専従学生指導部のはしくれだ。「これもプロの仕事だ。がんばるしかないな」と自分に言い聞かせて乗り切つた。

その後、八〇年代後期に戦旗・共産同は天皇式典やサミットなどでロケット弾を放つなど武装闘争を激化させ、挙句の果てに三里塚での同時

僕たちがブント系政治・思想集團から、持続可能な社会をテーマとしたNPO（法人格としては一般社団法人）「アクティオ」に生まれ変わつてから十年近くの歳月が経過した。でも、現在の僕たちの姿は、「ブント」を名乗つていた頃の思想的変遷の行き着いた先だと思っている。そ

のきつかけとなつたのが廣松涉との出会いだつた。

パラダイム・チェンジによる組織の大転換

一九八〇年、僕は学生組織の指導部だった。実は、その頃かなり廣松

哲学に入れ込んでいて、当時の学生組織の理論機関誌だった『若きボリシエビキ』に、廣松理論の引き写しのような論文を書いてしまつた。そしたら、組織のドン荒岱介から、「お前、これじやあまるで情況派じやないか」とこつびどく叱られた記憶がある。しかたなく面白くもなん

ある新左翼党派の数奇な運命

「情況」二〇一七年夏号

水沢 努

MIZUSAWA Tsutomu

一般社団法人アクティオ代表理事、埼玉県越生町議会議員、一九七五年立教大学入学

である以前に経営者であつた荒岱介が、そう思はないはずがない。案の定、左翼業界という極めてニッチなマーケットを相手に、持ち前の動物的嗅覚を駆使して大きく組織の舵を切つた。それを可能とする、抜群の経営手腕と独裁的権力を、彼は持っていた。反論のある人間は黙るか、組織を去るほかなかつた。

およそマルクス主義とは無縁な世界に生きていた（と僕の推察する）荒岱介は、にもかかわらず生粋のマルクス主義者・廣松涉の哲学を武器に「パラダイム・チェンジ」をかけ武装闘争とレーニン主義を葬り、「ほんとうのマルクス主義」を探求する思想集団として、組織の延命を図つたのだ。企業におけるC.I.戦略において、その伝統的なアイデンティイへの回帰・復興が企業変革の梃子となるように、この原点回帰のパラダイム・チェンジを梃子に、彼

は組織の全面改造を実現していった。

このまま武闘路線を突っ走つたら行き詰るしかないと考えていた僕は、組織の大転換を獄中で歓迎していた。実のところ僕は、投獄以前から共産主義には辟易していたのだ。

男の意地とか義理人情とか、およそマルクス主義とは無縁な美学に自分のアイデンティティを置いていた。

アイデンティティの置き場所はともあれ、マルクスの教えを冒涜していったという点においては、荒と同じ穴のムジナだった。かといって、マルクス主義の放棄は構成員のアイデンティティ喪失による組織崩壊につながるとの思いから、そこのこととは守るしかない、僕は腹をくくつていた。おそらく今、共産党中央もまた、似たような考え方から「共産主義」の建前を捨てきれないのだろう。その点では、荒岱介は僕以上にラジカルで正直だったといえる。な

にしろ、その後、一直線にマルクス主義（共産主義）をおおっぴらに放棄するところまで突っ走るのだから。

僕たちの反共主義への出発点は、実はこの廣松哲学を介したマルクス主義（共産主義）の原点回帰への呼びかけだったのだ。このアイロニーの罠は荒が仕掛けたものなのか、荒本人も知らずにはまつた罠だったのか、はたまた廣松の掌でさまと見える物象化のキントン雲だったのか、今となつては知るよしもない。

唯物史観の放棄とエコロジストへの変身

廣松思想への転換当初は、環境問題についても、あくまでもマルクス主義の観点から、資本主義の矛盾として論じていた。当時は、廣松の『生態史観と唯物史観』における次のような観点を共有していた。

不足は必然化される」というマルクスの人口論をベースに、「人口増加や環境汚染などの現在の傾向が統計上、一〇〇年以内に地球上の成長は限界に達する」と警鐘を鳴らした書だ。組織のエコロジストへの転換は、廣松哲学にのつとり、唯物史観の延長線上に生態史観を構想した結果ではなかつた。それは唯物史観の放棄の結果だつた。

以降、組織は廣松哲学一本やりから離れ、廣松の旧友であり義兄弟の加藤尚武の『環境倫理学のすすめ』が必読文献とされた。加藤尚武は多くの一次ブント出身者同様、反共主義への転向組だつた。組織は急旋回し、「ハラダイム・チエンジ」から「可能な中での最善の選択」を追求する、加藤流「エシックス」へと思想的に転回していく。マルクス主義からの離脱と革命の放棄は急ピッチで進められた。カール・シュミツ

「この”人間生態学（エコロジー）的な危機”は決して単なる生物学的な法則によって自然必然的に招来されたものではなく、産業文明の編制という歴史的・社会的・文化的な宮殿をもたらされるものにほかならない。それゆえ、当の危機は、産業文明の編制の在り方をしかるべき変革しうれば、超克することも不可能ではない。そして、われわれの信ずるところ、産業編制の在り方をしかるべき変化することは現に可能であり、それは亦當為である」

だが、こうした立場は、ほどなく捨てられた。マルクスではなく、その宿敵マルサスのほうに軍配はあげられたのだ。荒はローマクラブの『成長の限界』を組織の指定文献として、学習会を組織した。この文献は、いうまでもなく、「人口は幾何級数的に増加するが、食料は算術級数的にしか増加しないので、食料

トの説くように、「決断力」が政治家に求められる最大の資質だとするならば、荒岱介はブント系では傑出した政治家だつた。

荒はこうしたマルクス主義および廣松流マルクス理解からの決別を、後に自著『廣松涉理解』で次のように触れている。

「廣松は若くしてマルクスの魂に学び、終生その呪縛のもとに生きようとした」「マルクス・エンゲルスは『歴史を觀するにあたり、人間的主体と自然的環境との生態系的な相互規定態を表象していることはなしである』という具合に」「なんとしても唯物史観を生態史観と言い換えたのだ。しかし：言い換えはできないと私は思う」。

荒岱介は強烈なメジャーバー志向、一流志向の人物だつた。廣松涉といふ日本を代表する哲学者との出会いは、自らと自らの率いる組織のステ

イタスを大きく押し上げるものだつた。それに引きかえ、廣松のマルクスへのこだわりはあまりにも矮小なものに見えたに違いない。環境保護運動という大海に乗り出すには、もつとメジャーで金ピカな船が必要だったのだ。彼は環境保護に限らず、社会理論全般において、左翼の貧乏臭いマイナー性からの脱却を強く欲していた。最新型ボルシェ911を購入したのもこの時期だつた。

大転換のプロセスは、決して穏やかで民主的なものとはいせず、多少の組織内の軋みを生み出しはしたが、すでに共産主義に嫌気がさしていた僕には、歓迎すべき流れだつた。大多数のメンバーがこの変化を素直に受け入れたところを見ると、実はみな似たようなことを考えていたのかもしれない。

十年にわたり牽引していったのだ。文字通りの「荒技」である。

そんな中で、やる気の失せていた僕は、一九九九年、妻の住む沖縄に移住し、社会人としての自立にいそしんでいた。獄中で学んだ英語で塾業界にもぐりこみ、独立して塾経営を開始。塾は順調に立ち上がりにつづった。ところが、移住して数年後、久しぶりに上京して、組織の合宿で荒と顔を合わせると、悪魔のささやきが待っていた。

「俺はもう引退するから後はお前に頼む」。なんと言ふ言い草だ。身勝手にもほどがある。

さすがにいろいろと悩んだが、僕は引き受けることにした。塾経営はうまくいっていたが、これで人生を終えるのも何だかな、と感じはじめていた。最後には故郷に帰つて町議にでもなるか、という漠然とした気持ちも芽生えていた。親不孝の限り

を尽くしてきた両親への罪滅ぼしもある。最後に刑務所のガラス越しに面会してから、二十年近く音沙汰のなかつた娘とも再会できるかもしれない。もちろん、途中で放り出した組織に落とし前をつけなくては、という決意はあつた。数日後、荒のオファーに承諾の返事をした。塾は後継者に委譲し、二〇〇七年に単身上京した。

当然、僕は自己啓発セミナー路線を引き継ぐ気はなかつた。というか、そもそも引き継ぐ力などなかつた。あれは傑出した人心掌握能力を持ち、恐ろしいほどキヤラの立つた「荒岱介」という稀代のカリスマがいて、はじめて成り立つ路線だったからだ。組織の総会でいろいろごたがありましたが、結果的には、いとも簡単に自己啓発セミナー路線は終わった。

ブントは死んで実を残す

荒岱介は引退直前、それまでの自由主義思想や現代哲学などへの傾倒の後、プラグマティズム思想を強く推すようになつていて。特にイチ推しは、荒同様の極左からの転向者リチャード・ローティだつた。これまでの荒自身の思想的変遷や、時宜に応じた（悪く言うと恣意的な）組織運営を見れば、そもそも彼の思想的本質はプラグマティズム以外の何ものでもないということは明らかだつたが、高らかに、そして理論的根拠をもつて、自らの立ち位置を鮮明にしたのである。

実は、僕も根っからのプラグマティストだったので、ローティの主張には「なるほど！」と合点がいつた。ローティは個人の信念や思想、信条を趣味（決して趣味を低める意味ではない。趣味には命をかけるに値する



赤ヘル軍団の時代（83年の成田パイプライン供用阻止闘争）

マルクス主義を統合原理とする組織における、マルクス主義の放棄は、「神の死」を意味する。以降、荒は様々なジャンルの思想や理論を猛勉強して、それを自己流に解釈し、組織の思想としていつた。さらに、「知のクロスオーバー」と称して、学者や文化人、ミュージシャンなど、ジャンルを超えた人物との交流を深め、彼らを講師に呼んだワークショップ運動を推し進める

荒は機を見るに敏であり、マーケティングと人心掌握の力は、はつきりいて凄かつた。これが、ブント諸派を敵に回して、サバイバルを実現してきた力なのだと実感した。組織はこの時期、自らを「知的共同体」と位置づけ、一種の環境系自己啓発セミナー団体へと変貌していった。ただし、これがどう社会変革とつながるかの脈絡づけには、かなりムリがあつた。ムリを承知で荒は、マルクスを捨てた組織をその後拡大していく。

ものがいくらでもある)と同じ次元で扱うべきだとし、それは公共的なものとは共約不可能な私的レベルの世界だとした。また言説で世界を変えようとする左翼を、それが具体的な社会貢献につながらない限り無力な自己満足だとし、「文化左翼」と揶揄した。僕は、そうしたローティの徹底した相対主義と醒めたりアリズムに共感した。それは当時、関心を

- ①共同主観性と構造変動
- ②社会主義の根本理念
- ③読み直されるマルクス・トイツ・イデオロギーと共産党宣言
- ④物象化論と経済学批判
- ⑤哲学体系への新視軸
- ⑥対論・知のアクチュアリテート
情況出版

もつて読んでいたギデンズやベックなどの社会学系の考え方にも通じるものだつた。言説の中身は自己満足の世界に属し、社会との接点はその機能なのだ。

リーダーの私的な言説の世界に人々を囲い込む自己啓発セミナー路線は、その内容がどうあれ、実はローティの批判する文化左翼と等価のものだ。荒の最後にたどり着いた所はそうしたアイロニーだつた。廣松の物象化論も、共産主義という信念の物象化を解き明かせば、一瞬にしてアイロニーの体系となる。そして、アイロニーを体験したところからリベラル・アイロニストは始まる、というのがローティだ。現在の僕たちは、そうした自立したリベル・アイロニストへと旅立っていくプロセスなのだ。

アクトイオは、数年間、社会運動の交流誌を発行してきたが、今は停

止し、残った資金で社会貢献活動への助成を行つてゐる。メンバーが何かにかかわらず、これまで様々な団体や個人の活動に資金援助を行つてきた。いずれ資金の枯渇するときがやつてくるが、そのとき法人は解散する。

かつて第一次ブントの島成郎は、「虎は死んで皮を残す。ブントは死んで名を残す」と言つたが、僕は、たとえささやかであつても、「ブントは死んで実を残す」ことを願つてゐる。島先輩をはじめとする先達のように。